

存在とリズム

存在とリズム

青空の下で、気持のよい風の吹くとき、Hを抱いてリズムをロずさみながら揺っている、Hは笑いだす。ブランコにHを坐らせ、軽くこいでいると、Hは足をつっ張って少し

津守 真

こぐ。しばらくするとブランコからおりようとするが、足が地面につかず、すぐにひっこめる。自分の身体のまわりとごく近い空間だけが全世界のようなHにとっては、ブランコから足を下ろしても地面につかないときは、谷底におりるように感じるのかもしれない。

その存在が身体に密着している子どもにとって、身体のリズム感覚は、存在の確かさの感覚に大きな比重を占めているのではないかと私は考えていたが、最近、三日間つづけてHと一日を過す機会があり、このことを考えることができたので記したいと思う。

Hは近頃発作が頻繁になり、ほとんど一日中室内で、それも三メートル平方位の空間で、立った姿勢で足踏みなど、身体を揺らして過すことが多い。外部から見ると単調で退屈な生活のようにみえる。ところが一緒に時を過すと、その生活は実に変化に富んでいる。音楽が流れていると、きげんよく笑いながら身体を動かす。私も腰を下してHの動きに合うリズムを声にすると、Hもたのしそうに、Hの身体の感覚を共有できるように思う。Hはかならずしも音楽に合わせて身体を動かしているのではなく、Hの内部で身体の

リズムがさまざまに変化してゆくみたいである。音楽やリズムの感覚は、言語や文字によって表現できない部分が多いが、大ざっぱにHの動きを分類すると、次のようになる。

足を交互に上下に動かして足踏みをし、体を揺する。これはきげんのよいときの主要な動きのひとつである。同じ場所でも足踏みをすただけであるが、前進のイメージがある。

身体の動きをとめ、頭を下に向け、片手を下方に伸ばして静かになる。これは気げんがわるいのではない。むしろ、動の感覚が静にかわり、気分が内向した瞑想の時ともいえる。

身体の動きをとめ、頭を上方に向け、腕を上方に伸ばしてゆっくりと動かす。このときは目も光の方に向い、口ずさむ音楽も自然に高音になる。下方への動きが低音部の音になるのと対照的である。

腕を水平に滑るように動かし、指先を見ながら身体を左右に半分くらいまわす。これは地平の眺望である。足踏みの前進リズムがある程度つづく、動きが静止して、下方、上方、水平のイメージが挿入される。このほかに次のような動きがある。

左右を蹴るような動作を加えた足踏みをすす。これはダンスの足の動きに似ており、前進のみでなくて踊るような遊びの気分がある。

両足をそろえてとぶ。これは上方への飛翔であろう。

足首を後に蹴上げるようにして足踏みをすす。走行の前進である。

ひもを両手に持ち、両手を左右に引張ってひもを緊張させて張る。以前には、これはHの特長的な行為だったが、いまは両手は緊張していても、ひもはたるんでいることが多

い。目と手とひもとの間につくられる緊張した空間がゆるんできたといってよい。手の緊張が弛むと、ひもを揺らし、足踏み運動がはじまる。私はそつとHの掌をにぎる。そうすると、ときどき私の方に手をのばしてさわる。

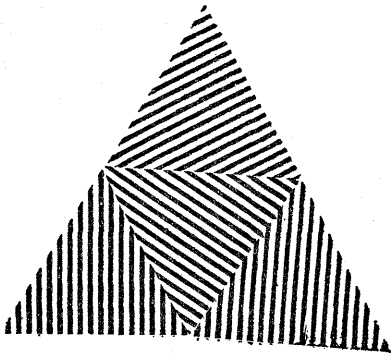
Hの身体の動きに合わせてリズムの調子をかえながら音楽を口ずさみ、声をかけたり手をとったりしていると、二、三時間はたちまち過ぎてしまう。Hの小さな世界に、前進あり、停滞あり、躍進あり、静寂あり、上方下方への動きがある。その動きの感覚を共有できるとき、わずか三メートル四方の空間が、変化に富んだものとなる。

普通の人の生活には、あまりにも多くの内外の刺激があつて、身体の内部で生起し変化する感覚に気付くことを困難にしている。Hのような子どもとふれると、リズムの感覚

は、外部の刺激からのみ生れるのではなく、身体をもった人間に内在することを認識させられる。子どもの固有の身体のリズムに合わせて大人が音楽のリズムを加えるとき、子どもはそれをよろこび、大人のつくり出すリズムを共有する。こうして、原始的な身体感覚に、文化としての意味が付与される。

発作によってリズムがくずれる

午後になって、Hは何かきげんがわるくなり、床の上に立っていたが、私には全く突然に、真直な棒を後に倒したように、Hは後向きに床に倒れ、大きな音を立てた。激しく泣いた。家においてもこういう発作が毎日起るという。Hにとっては、突然頭を殴られ、突き倒されたようなものだろう。身体の内部的できごとだけでも、Hの身に覚えのないことで、突如襲いかかる外的できごとである。い



そいで抱きかかえると、私に抱かれて泣きつづける。身体的生理的障害をもった子どもの運命的なできごとである。本人にとっては不可解な瞬間だろう。少し前までの人間的秩序の世界が、発作という外的衝撃によって崩壊し、Hの世界は混乱の状態に陥る。しかし、その中でも、間もなく、私に抱かれながら、自分の頭を壁や机に軽く何度かぶつけてみる。自分の頭の中に、いま突然起ったことは何だったのだろうか、確かめているみたいである。生理的に受動的に起ったことを能動にかえることによって、自分の秩序を回復しようとする試みのように思われる。一時間くらいでまた笑い始める。

次の日に発作を起したときは、足踏みの前進リズムの最中だった。Hのひざが私の足にほんの一寸ぶつかった。Hは驚いた表情をし、動きが一瞬止まり、そこから発作がはじ

まった。私に抱かれてぎくぎくとふるえ、激しく泣いた。椅子に腰かけていた私の足にHの方からぶつかったのだが、Hにとっては、外部の衝撃によって突然身体感覚による内的世界が乱されたのだろう。内的世界と身体感覚の世界とはHにとっては同一であり、驚きがひきがねとなって発作となった。目や耳の感覚世界での刺激によっては発作は起らない。前進し躍動する身体感覚の源であるひざがぶつかることにより、発作がはじまった。Hは手足が緊張し、泣きわめき、混乱しながらも、壁に頭をぶつけてみる。

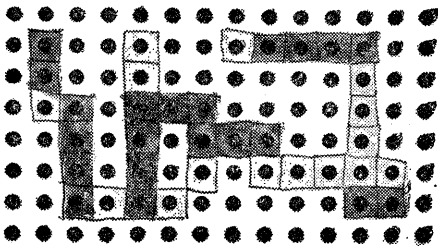
三日目には、発作が起きる前に機嫌がわるくなり、私の手をひきよきて、私を立たせたので、私も注意していた。そのうちに私によりかかり、ぎくぎくと発作がはじまった。私に抱きついて泣いていたが、私によりかかりながら収まった。四十分もたつと機嫌がよく

なり、前進足踏みのリズムがまたはじまった。

リズムの中でも大人も一緒にいる

このような発作による内的世界の秩序の混乱とその回復の過程は、普段Hの面倒をみている大人には熟知のことかもしれない。たまたま、三日間ではあっても、一緒に時を過した私との間で、衝撃の受け方にも、混乱からの回復の仕方にも変化の過程があることを考えると、発作という身体的生理的できごとも、保育と関係が深いことがわかる。最初は、子どもが不意に襲われる衝撃に大人も驚くのだが、生理的のみならず精神的にも混乱の中にある子どもを抱きとめてその時を一緒に過すことにより内的秩序を回復することを体験する。

こういうことを考えると、発作という生理



的に運命づけられた衝撃も、単に生理的病理とのみ考えるのではない。その障害をもちながらも保育によって生活しやすくなると考えた方がよいだろう。発作のあと、頭を自分で壁にぶつけてたしかめるのも、長年にわたる両親やその他の大人たちの保育から生み出された本人の精神的ゆとりであろう。

再びとりもどしたリズムと存在

身体感覚の世界に生きている子どもにとっては、身体のリズム感覚はとくに重要な意味をもつであろう。前進の感覚、静止して下方に思いを向ける感覚、上方の光に向って体を伸ばす感覚、水平に腕をまわして眺望の空間をつくる感覚、緊張と弛緩の空間をつくり出す感覚等は自分の身体のリズムに伴う体験である。普通の大人も、一日の中で気分の浮き沈みを体験するのであるが、それらは外部の

できごとによって左右されることが多い。しかし、その最初は、ごく幼いときのこのような身体感覚にその源があるのかもしれない。

この中から前進の感覚を例にとっても、大人の生活の無意識の層で、これは重要な役を果している。そのことは特殊な場面を考えてみるとわかる。車が渋滞して全く動かないときにはたとえ短時間でも耐えがたく感じられる。少しでも前進していれば時間を過し易い。精神的な面でも、困難はありながら前進している感覚が生活を支える。たとえ安楽でも前進感がないときには生活は耐えがたい。どんな子どもでもその点は同様なのである。

外界の認識が成立していない発達段階において、生命的な存在感、身体のリズム感覚と密接に結びついているように思われる。

(愛育養護学校)